

かつてと言っても1980年代のことですが、「ふくい国際ビデオビエンナーレ」で初期ビデオアート作品を回顧する特集が組まれたことがあります。ビデオが個人でも扱える新しいメディアとして普及し始めたのは1970年代で、80年代当時から見て約10年前を振り返り、その意義を検証する試みでした。80年代はナム・ジュン・パイクが来日するといった出来事もあり、ビデオアートが一種の社会的ブームとなって、広く一般からも注目されていた時代です。しかしながら初期作品を見る機会はほとんどなく、この特集は非常に貴重なものとして高く評価されました。

70年代の作品は、ビデオテープの編集がまだ一般向けの機器では困難だという、技術的な限界はあるものの、それを逆手に取り事件現場を長廻しで延々と撮り続ける等、より根源的にメディアと向き合う姿勢が鮮明に表れていました。しかし作品の中には、画像が激しく乱れ、ほとんど何が写っているのかも分からず、残っているのはほぼ音声のみといったものもあり、約10年というそれほど遠くない過去なのに、映像が消滅しつつある状態を目の当たりにして驚かされたのです。

この時、先端的なメディアを用いた表現として、華やかな存在であったビデオアートも、10年くらい経ったら画像が消滅して、見ることも出来なくなってしまうのだろうか、そんな不安が頭によぎりました。面識のあるビデオアーティストに、ビデオテープはどれくらい先まで残るのだろうか尋ねた際、70年代はテープの素材があまり良くなかった事情もあるので、20年くらいは持つのでは、という答えをいただいたこともあります。

当館が開館して25年の節目を迎えた今、縁のある方々からのお祝いのメッセージもいただきました。

http://www.aac.pref.aichi.jp/25th_interview/

しかしこの25年という歳月は、ビデオ作品の保存という観点からは、テープの状態はどうか、画像には乱れがなく正常か等々を検証してゆかねばならない時が来たことも意味しています。

その一環として現在取り組んでいるのが、岩井俊雄『愛知芸術文化センター・シンボル映像』（1992年）の、リマスター版作成です。この作品は地下2階のマルチビジョン等で正時ごとに放映され、来館者に時刻を知らせる役割を持った、一種の環境映像です。開館当時この作品はレーザーディスク(LD)とβカ

ムで納品されましたが、実は完成原版(マスター)は D2 というフォーマットでした。この D2 マスターから新たに館内放映用のデータを作成すれば、現状より美しくより鮮明な画像でご覧いただけることになります。



しかしながら制作より 25 年以上が経過した D2 テープは、まだ再生可能なのかという不安があります。また当館には D2 を再生するデッキがなく、新たなコピーを作成する作業は外部のスタジオで行わねばなりません。調査の結果、名古屋では対応できる会社は見つからず、映画フィルム修復等で高い評価を受けている、大阪の IMAGICA ウェストにお願いすることになりました。大阪までテープを搬送し、まずは D2 の状態確認です。幸い今も再生可能で、目立った画像の乱れもありませんでした。リマスター作成後は、館内の放映システムに画像を取り込んで...、とまだまだ作業は続きますが、いずれより美しくなった本作を皆様にご覧いただけそうな見通しです。



(T. E)